



特集: 自 著 自 薦

クラブ・インベストラ이프の仲間には著書を上梓している方もたくさん、いらっしゃいます。また、どんな本を読んだらいいかと迷っている方も多いと思います。そこで今月号では著者自ら推薦本を選んでいただき本の紹介を書かせていただきました。みなさんが投資や資産運用のことをより深く考えてゆく一助となる本ばかりです。参考になれば幸いです。

自著を自薦していただいた方々(順不同)

竹川 美奈子氏、増井 克行氏、馬淵 治好氏、真壁 昭夫氏、高橋 忠寛氏、渋谷 健氏、近藤 由美氏、大江 英樹氏、山崎 俊輔氏、鬼丸 昌也氏、吉野 貴晶氏

臆病な人でもうまくいく投資法—お金の悩みから解放された 11人の投信投資家の話

著者: 竹川 美奈子

出版社: プレジデント社

定価: 1620 円

2月 25 日に 3 年ぶりに新刊を出しました。『臆病な人でもうまくいく投資法—お金の悩みから解放された 11 人の投信投資家の話』(プレジデント社)という本です。

今回描きたかったのは、投資のノウハウというよりは、「投資が趣味でも仕事でもない、ふつうの個人投資家さん一人ひとりのストーリー」です。投資をはじめたきっかけ、どうしてその投資スタイルに辿り着いたのか、投資を通して(お金以外に)どのようなリターンを得られたのか—などを通して、リアルな投資をお伝えしたいと思いました。—昨年から取材を重ねてきましたが、ようやく 1 冊にまとめることができました。

本書は個人投資家の事例を読みながら、同時にコツコツ投資の知識が身につく構成になっています。今までにないスタイルの本なので、皆さまの感想が楽しみです。





ご隠居と熊さんの年金資産運用の極意—ナニワの名跡 「こうやっ亭ぶんさん」師匠の年金運用寄席高座—

著者： 増井 克行

出版社： 金融財政事情研究会

定価： 2057 円

本書は、ある日突然、企業年金の資産運用を担当することになった「熊さん」が、「ご隠居」に指導を受けながら学んでいく、そんな様子を描いた「年金資産運用の入門書」です。

書名からもわかるように、年金資産運用や資産運用会社などの機関投資家の方々をおもな想定読者とした出版企画となっています。が、「個人投資家」や「投資信託の販売担当者」の皆さまにも役立つような「目から鱗」の内容をあれこれと盛り込みました。



とりわけ、「伝統的資産の運用と新たな動き(第二幕)」や「オルタナティブ投資(第三幕)」などの運用戦略の説明パートにおいては、近年、個人向け投資信託として提供されている戦略も多く取り上げています。これらのページでは、それぞれの運用戦略の特長やメリットについての言及に留まらず、投資に際しての注意点や課題にもかなりの紙幅を費やしました。読者の皆さまが、戦略ごとの長所・短所の両面に目配りしながら、立体的に運用戦略を理解できるように工夫したつもりです。

まずは、肩の力を抜いて。気になるページを「つまみ食い」しつつ、「ご隠居」と「熊さん」の滑稽な世界を楽しんでみてください。その結果、各々の運用戦略を理解し判断する目が養われていたとしたなら…筆者にとっては望外のよろこびです。

ゼロからわかる 時事問題とマーケットの深い関係

著者： 馬淵 治好

出版社： 金融財政事情研究会

定価： 1944 円(電子版 1750 円)



筆者は、頻繁にセミナーでの講演を行なう。そこで高評価をいただける場合は、「市場が大きく振れて、何が起きているのかよくわからなかったが、話を聞いてよくわかった」、「マスコミで経済に関する報道をよく目にするが、そこで使われている用語自体が全くわからず、その解説を聞いたのでよかった」といった感想をいただくことが多い。

近年は、経済面でも金融面でも、グローバル化が進み、日本から遠い国のある出来事が、日本経済や日本の株価、金利、円相場などに、多大な影響を与えることが多くなった。そうした経済動向・市場動向の解説は、マスコミやネットで以前に比べても大量に得られる。しかし、そもそもの用語やそれが意味する概念自体が、海外のなじみが薄いものも多く、かえって情報を咀嚼することが難しくなっているように感じていた。

そうした問題意識を持っていたところ、金融財政事情研究会から、「原油価格や円相場、米国経済の動向、東京オリンピックなど、今話題となっている時事トピックを取り上げて、それがどのような意味を持っているのか、初心者向けにわかりやすく解説する本を著して欲しい」というご提案をいただき、まさに絶好の機会だと考え、大いに張り切って執筆した。

既に本著を手にとってお読みいただいた方からは、「最初は厚い本だと感じて気後れしたが、読み始めたらあっという間に読み終えてしまった」「とてもわかりやすかった」などのご感想をいただいている。毎度おなじみの「父ちゃんの立場指数」や、「マラドーナ現象」「松岡修造効果」といった「珍語」が満載なので、是非楽しんでお読みくだされば幸いだ。



VW不正と中国・ドイツ経済同盟

著者： 真壁 昭夫

出版社： 小学館

定価： 1404 円



20世紀は米国の世紀と言われた。米国が経済的、政治的に世界のトップに立ち覇権国としての地位を謳歌した。その米国の経済力の低下に伴い覇権は、徐々に低下傾向にある。そうした状況下、世界の中で実力を着けてきたのが次の覇権国の候補である中国と、欧州圏のリーダーを任ずるドイツだ。21世紀は中国とドイツの時代といわれ、足許では、両国の経済に世界の注目が集まっている。しかも、様々な意味で補完関係をなす両国が経済的な結びつきを強めている。

特に、基幹産業である自動車部門で、トヨタを激しく追い上げるVWは中国市場でトップブランドの地位を持ち、さらにシェアの拡大を目指して積極的に投資を行っている。その背景には、ドイツの神聖ローマ帝国の流れを受け継ぐ”世界を握る”との発想が存在する。そうしたインセンティブもあり、ドイツと中国の経済の繋がりはソフトアライアンススペースの”経済同盟”に注目する必要がある。



一方、中国経済の減速の鮮明化、欧州経済圏が抱える問題が顕在化する中で、両者の繋がりが、世界経済にどのような影響を与えるかを検討することが重要になる。本書は、フォルクスワーゲンの不正問題に絡んだ、中国とドイツの接近ぶりとその問題点を検証している。

巨大な経済力を有するこの経済同盟は、世界経済の支配者なのか破壊者なのか。ともに覇権主義を抱える新たな経済勢力の動向と、世界恐慌を引き起こしかねない危うさをレポートする。

銀行員が顧客には勧めないけど家族に勧める資産運用術

著者： 高橋 忠寛

出版社： 日本実業出版社

定価： 1512円

ファイナンシャル・プランナーの高橋忠寛です。私はメガバンクと外資系にて10年超の銀行勤務を経て、2014年に株式会社リンクマネーコンサルティングを設立し独立しました。現在は、投資助言代理業者として金融商品の販売には関わらない完全に独立した立場で資産運用や保険、相続についてのコンサルティングを行っています。

今回は昨年11月に出版した拙著『銀行員が顧客には勧めないけど家族に勧める資産運用術』（日本実業出版社）を紹介させていただきます。



銀行でも様々な仕事を経験しましたが、個人の資産運用に関するビジネスは法人同士の取引と違って、銀行と顧客の間には圧倒的な情報格差があります。あまりに何も知らずに、カモネギ状態のお客様をたくさん見てきました。この情報格差を利用し顧客の無知につけ込んでいるとしか思えないような商品や営業手法もたくさんあります。

本書では、金融機関の営業現場で直接見てきた経験をもとに、資産運用に成功している人の習慣や、失敗してしまう人の特徴を説明しながら、銀行員のホンネや金融機関側の事情をふまえて、本当に効率的な資産運用に取り組む方法について説明しています。



こちらで資産運用に関する情報収集に取り組んでいる皆さまには釈迦に説法かもしれませんが、金融商品の売り手の立場や個人営業の現場の事情、他の個人投資家の動向を確認しながら、今一度資産運用の基本的な知識の確認にお役立ていただけたら嬉しいです。

渋沢栄一 100の金言

著者： 渋沢 健

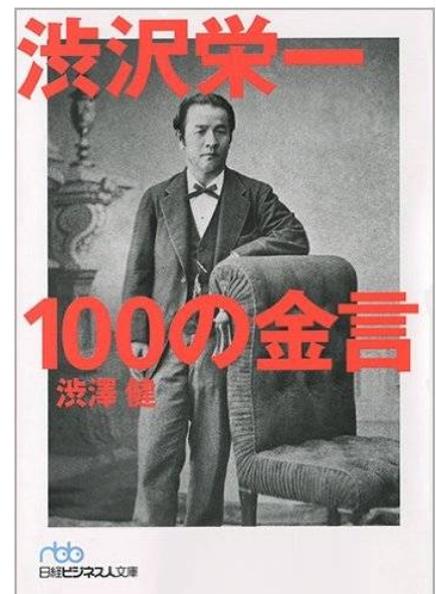
出版社： 日本経済新聞出版社

定価： 864 円

NHK 連続テレビ小説「あさが来た」を見ていらっしゃるでしょうか。私は毎回(録画で)逃さず、見ています。朝が来た、つまりキラキラ光った新しい社会の到来を連想させるドラマですが、その主役は政府や武士ではなく、民間の実業、そして、女性の活躍というテーマ設定です。とても心強いですね。

この新しい時代の幕が開く舞台に、民間力の向上をライフワークとした渋沢栄一が「銀行の神様」として登場します。銀行と商いの本質は「お金」ではなく、信用と教育であるという渋沢栄一の思想のエッセンスを短いシーンで的確に描いていたと思います。

一人ひとりが、それぞれの立場において、常に学び続けながら行動するという良識が持続的な豊かさが実現する社会へとつながると考えた渋沢栄一。インベストラ이프を愛読される方々





のお考えと親和性が高いのではないのでしょうか。

本人が遺した言葉を拾い上げ、現代用語に訳しながらショートコメントで今の時代の現状と照り合わせた「渋沢栄一 100の金言」を今年の1月に刊行しました。ロングセラーとなっている「渋沢栄一 100の訓言」の第二弾であります。新作は今まで渋沢栄一とあまり接点がなかった層を特に意識して執筆しました。

自分の祖父の祖父である渋沢栄一は、「クラシック」ではなく、現代に通じる「ロック」かもしれない。そんなことを考えていますが、いかがでしょう。是非、手に持ってみてください。

世の中を良くして自分も幸せになれる『寄付』のすすめ

著者： 近藤 由美

出版社： 東洋経済新報社

定価： 1620 円

寄付の本は珍しいということで、初の“寄付指南書”というキャッチが帯に付けられた。寄付とは、あくまで個々による自発的行為であるが、社会や未来を良くするための投資であり、本質的に長期投資と相通じる部分がある。そして、最近の心理学研究では「誰かのためにお金を使うと、自分の幸福度が増す」という。これはカナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学のエリザベス・ダン博士らの研究によるもので、プロローグの中で紹介した。

一方、日本には“寄付の文化がない”としばしば揶揄されることが多い。だが、決してそんなことはなく、歴史をひも解けば、奈良・東大寺の大仏建立から始まり、仏教的チャリティを背景とした寄進や布施、地域金融・相互扶助を担う無尽や頼母子講、地域の皆がそれぞれ拠出し合い、橋や道路等を建設する自普請があった。そうした日本の寄付は、地域や共同体を支え、人々のつながりや絆を強めるための機能と役割を担ってきた。

それらは、第1章で詳しく紹介しているが、本書は、“寄付のガイドブック”であり、拙書を活用することで、“自らが納得できる、後悔しない寄付”をすることができるようになっている。第2章では、寄付を実践する人たちとして、楽しみながら寄付をする6人の寄付者の姿をルポした。著者自身も“寄付初心者のチャレンジ”として、横浜の認定 NPO 法人に物品寄付をした。3章～8章では、寄付の受け皿「非営利団体」を知る、NPO 法人との実態と課題、新寄付税制の活用方法、寄付の種類や方法、後悔しない寄付先選びと、寄付の最新事情と併せ、ハウツー的な構成となっている。





寄付というと「敷居が高い」「特別な人がするもの」といったイメージを持つ人も少なくない。だが、寄付は、市民や社会を育み、最終的には企業の市場が健全に成長するための基盤となる。“お金”というエネルギーをどう活かすか。投資は、社会・経済の発展にとって極めて重要だが、その手前に「寄付」という投資もあることを読者の皆さんに知っていただきたいと思う。

経済とおかねの超基本 1年生

著者： 大江 英樹

出版社： 東洋経済新報社

定価： 1620 円

何気なく日常で使っている「景気が良い」とか「悪い」とかいう言葉は一体何をあらわしているのでしょうか。あるいはニュースで「GDP」がプラスとかマイナスとか言っていますが、これは何のことなのでしょう。普段使っている経済に関する言葉も実はぼんやりとしかわからないことが多いものです。学校を出て会社に入った時には先輩や上司から「日経新聞を読みなさい」と言われた人も多いと思いますが、読んでもさっぱりわからないのでいつのまにか読まなくなってしまった人も多いのではないのでしょうか。

「生活していく上でそんな経済のことは知らなくてもいい」、そう考える人も多いと思いますが、実は経済のことを正しく知っておくことは日々の生活の中で“損をしない”ようにするために決定的に大事なことなのです。

そこで、この本の目的は、ズバリ、「人生において大きな損をしないために経済のしくみを正しく知ろう！」ということです。

この本の特徴は、経済の基本を知っておくことでいかに損が未然に防げるかということが身近な事例も交えて紹介されていることです。できるだけレベルの高い話もやさしく書こうとチャレンジしています。なぜなら、経済用語を知ることが本書の目的ではなく、そのことばの裏側にある考え方を理解するためだからです。本の表紙の帯にも書いてありますが、まさに「わかりやすいにもホドがある」一冊です。経済学を勉強したことがある人もない人もぜひ読んでみてください。きっとわかりやすい！とうなずいていただけると自負しております。



**誰でもできる 確定拠出年金投資術:
ほったらかしで『年率 10%』を目指す方法**



著者： 山崎 俊輔

出版社： ポプラ社

定価： 842 円

日本ではすでに 550 万人の退職金が確定拠出年金（日本版 401k）に移行しています。自己責任による資産運用の成否が退職時の受取額を左右する制度ながら、約 40% の人は全額を元本確保型商品（定期預金等）にしているとみられています。

仮に毎月 1 万円の掛金を会社が拠出したとして、22 歳から 60 歳まで 38 年間積み立てたとすれば元本は 456 万円です。全額を定期預金としていた場合、年利 0.2% のままだったとすれば退職時の受取額は 474 万円になります。利息は微々たるものです（現下の金利ならもっと少なくなる！）。

仮に年利 5% を確保することができれば、60 歳時点の受取額は 1358 万円となり、その差は 3 倍にもなります。同じ会社で働き、同じように出世した 2 人の社員がいたとして、給与も賞与も同水準であって確定拠出年金の掛金が同額であったとしても、定年時の最終受取額には差が出る、ということです。これは、老後格差はまさに自分で決める時代にある、ということです。

本書では、会社員が仕事やプライベートに支障を与えず無理なく資産形成を続け、できれば高利回りを得る方法をまとめてみました。タイトルは刺激的ですが、難しいことを悩んで未実行であるより及第点の資産運用を省力化して実行することのほうが意義があるという考え方です。

岡本さんの著書「自分でやさしく殖やせる「確定拠出年金」最良の運用術」よりはもっと基本的なところをまとめているので、投資デビューの最初のとっかかりとして拙著を手にとっていただければ幸いです。



僕が学んだゼロから始める世界の変え方

著者： 鬼丸 昌也

出版社： 扶桑社

定価： 1512 円



「『世界を変えるなんて大げさだ』と感じるかもしれない。
『自分にできるわけがない』と思うかもしれない。
でも、今の自分にできること、無理をせずに始められること。
そんな小さな一歩を踏み出すことが、自分や周囲を変え、
世界を変えていく。
すべての人に、その力がある。僕は、そう信じている。」
——「まえがき」より

カンボジア・ラオスでの地雷・不発弾処理支援、ウガンダ・コンゴ・ブルンジでの元子ども兵社会復帰支援、そして、岩手・大槌での被災者生活再建支援と、さまざまな支援活動を行う認定NPO 法人テラ・ルネッサンス。資金もなく、人脈もなく、英語も話せないという大学4年生の僕が、カンボジアでの地雷除去現場での衝撃を受け、テラ・ルネッサンスを立ち上げることになりました。

まずは、「すべては伝えること」からだど、友人や知人に、地雷問題をお話するところから始めた2001年。数々の失敗をしながら、気づいたのは、「人は、共感や納得によって、動く」ということ。遠い国の問題は、自分たちにも関係があるのだと共感してもらい、自らの問題として動いてもらうには、どうしたらよいのだろう。その一点のみ、真剣に考え、実践をしてきた13年間(発刊当時)。おかげさまで、ひとりで始めた活動が、少しずつ、いろいろな人の応援を頂いて、合計6か国での活動に広がっています。「今の自分にできることがある」と、ただ、そのことだけを信じて、がむしゃらに進んできた13年間の軌跡をまとめたのが本書になります。

何かを始める一歩を踏み出したいという方や、これからの社会を担っていく若い方にはぜひ、読んでいただきたいと願っています。



No.1 アナリストがいつも使っている投資指標の本当の見方

著者： 吉野 貴晶
出版社： 日本経済新聞出版社
定価： 1620 円

この本は、株式投資をする際に、どのような場面で、どのような投資指標を使って、現実にもどのように銘柄を選んでいくべきか、投資のプロが実際に行っている手法をもとに解説するものです。銘柄を選ぶための実践的な内容です。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

足下の日本株は、大きく変動しております。超低金利の中で、好材料と悪材料で投資家のセンチメントが大きく変化して、それに連動して株価が上がったり下がったりを繰り返しています。また、世界的に低金利で流動性(カネアマリ)が高まっている中で、マネーフローが安定していません。外国人の買いが入ると相場は上昇し、売りでは急落も見られます。こうした時こそ、目先の材料やセンチメントに振り回されず、じっくりと企業価値や投資尺度で銘柄を選ぶ必要があります。

この本は、皆様が株式投資をする際に、先ず、最も重要な点として、投資期間をどのようなするか認識することです。期間は短期、中期、長期と超長期の4つに分類の何れかとしてとらえます。そしてそれぞれのスタンスに応じて、投資指標の使い方を示しています。例えば、7年以上を超長期としていますが、超長期投資であればじっくりと割安株を選ぶPBR(株価純資産倍率)が0.8倍以下で、自己資本比率、経常利益と配当利回りを合わせて、将来、復活が期待される銘柄を選びます。このように、投資尺度の性質に合わせて銘柄選別をするためには、期間の選別が重要なのです。

そして、それ以上に、投資期間を定めることは「下がっても売らなければ、損にならない」という誤った認識を避けるためにもなります。相場の流れに乗って一儲けしようと考えている人には向きませんが、論理的に投資を考えたいという方にはとても役に立つ内容になっています。

